日本語･韓国語･中国語･英語の無主格文について

―― 川端康成『伊豆の踊子』『雪国』の原文と翻訳文を検討材料として ――

穆　　欣

1．はじめに

日本語は文の中心が述部にあり、主要部後続言語（head-final language）とされている。そのため、主格が文面に出現しない場合がしばしばある。

三上（1972a）は、主格（ガ格）・対格（ヲ格）・与格（ニ格）・奪格（カラ格）などを述語の補語としてみなすべきだと主張している。他方、三上（1963）は主格の重要さを認めてはいるが、文の成分としては必要不可欠ではないことを示している。

また、日本語は英語と異なって、主題ハと主格ガが併存しているため、三上（1970）は主題ハの省略を「略題」と言い、主格ガを持たない文を「無主格文」と名付けている。

2．研究の目的

穆（2012）は、日本語と韓国語・中国語に関する主題の省略について検討したが、本稿は日本語の無主格文に着目し、三上（1970）の挙げた種類①～⑧の無主格文（以下は無主格文の八種類と略称）に関して、実際の出現例について検討すると同時に、韓国語・中国語・英語の訳文を付し、訳文は無主格文であるか否かを確認し、日本語の特徴をさらに明確にしたい。

3．先行研究

三上（1970）は、日本語における無主格文の八種類を挙げ、以下の例文を示している。

① 時の副詞句は“デアル”を接尾して独立した一文の体裁を与えることができる。（種類①）
（1）ある日のことでございます。

② 時間、寒暖、距離を表すときに、しばしば主格を欠く。（種類②）
（2）何時ですか。

③ 所動詞（ニ）ナルにも主格を欠く用法がある。言い表されない主格は、時ガ、気温ガ、状態ガ、事態ガである。（種類③）
（3）十一時になった。

④ 格助詞カラ、デ、ニが主格の代用を勤めることがある。（種類④）
（4）警察で事故の原因を調べている。

⑤ 主格代用の形式がある。（種類⑤）
（5）わたしとしては、名案もない。

⑥ 端折りや陰題で“ガ”が文面から消えている場合も数に入れておく必要がある。（種類⑥）

（６－１）それに加えて長い間の貿易不振です。（貿易不振トイウコトガアリマス）

（６－２）今だって絶対的である父だ。（今ダッテ父ハ絶対的デアル）

⑦　副詞ソウ、コウ、ドウをめぐる問題がある。（種類⑦）

（７）鯨はケモノかい。そうです。

⑧　主格を不問に付する言い方がある。（種類⑧）

（８）三の鳥居をくぐって、なお五十メートル進むと、やっと拝殿に達します。

４．研究方法

本稿では、三上（1970）の無主格文の八種類に該当する文を川端康成の『伊豆の踊子』・『雪国』中から抜粋し、日本語の原文と韓国語・中国語・英語の翻訳文を対照しながら分析を進める。

日本語の『伊豆の踊子』は新潮文庫版[1]を用いた。韓国語訳は문예출판사（文藝出版社）より出版された장경룡の『설국（雪國）』中の「이즈의 무희」を用い、中国語訳は上海訳文出版社より出版された侍桁の『雪国』中の「伊豆的歌女」を用い、英語訳はＪ・マーティン・ホルマン（J. Martin Holman）の『*The Dancing girl of Izu and other stories*』中の「The Dancing girl of Izu」を用いた。

日本語の『雪国』は、吉林大学出版社による出版された『雪国・伊豆の踊子　雪国・伊豆舞女』[2]を用い、韓国語訳は、장경룡の『설국（雪國）』中の「설국（雪國）」を用い、中国語訳は、侍桁の『雪国』中の「雪国」を用い、英語訳は、Edward G. Seidensticker の『*SNOW COUNTRY*』を用いた。

なお、三上（1972a）は日本語のハを主題とし、ガを主格としている。韓国語においても、가(이)[ka/ga(i)]を主格、는[nɯn]/은[ɯn]を主題と見なす学者も少なくない（채・이 1999参照）。また、比較する観点から、本稿では便宜上英語のsubjectを主格（nominative）と呼ぶ。さらに、本章における無主格文と対応して、主格を有する文を有主格文とする。韓国語訳の分析部分には、国際音声記号でハングルの発音を示す。

５．分析

①　時の副詞句は“デアル”を接尾して独立した一文の体裁を与えることができる。

以下は種類①に当てはまる『伊豆の踊子』中の原文および訳文である。

（９）ア　一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。

（９）イ　혼자서 이즈（伊豆）여행을 떠난 지 나흘째 되는 날의 일이 었다.

（９）ウ　我独自旅行到伊豆来，已经是第四天了。

（９）エ　It was the fourth day of my solitary journey down the Izu Peninsula.

（９）アの日本語の原文は無主格文である。その特徴は、文の主節が「時を表す言葉＋の＋形式名詞コト＋デアル」という形式を持っていることである。

全体から見ると、種類①はある物語の時間的な背景を説明するという特徴がある。三上

(1970) は「『デアル』を省いて、つまり文としての独立をやめて、副詞句として次へ接続させることもできる」と指摘しており、「ある日の暮方のこと、一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた」という例文を挙げている。三上の例から見ると、実際に「の＋形式名詞コト＋デアル」という構造は時間を表すニ格の機能を有すると言える。（9）アを例として、「の＋形式名詞コト＋デアル」を脱落させ、ニ格を添加して、次の文に接続させると、以下の（10）になる。

（10）一人伊豆の旅に出てから四日目ニ、修善寺温泉に一夜泊まり、湯ヶ島温泉に二夜泊まり、そして朴歯の高下駄で天城を登って来たのだった。

（9）イの韓国語訳は、日本語の原文と同様に無主格文である。原文中一人の後に省かれたデ格が韓国語では訳出されているが、「四日目のことだった」の部分の表現は、日本語と一致している。

それに対して、（9）ウの中国語訳は、後半の「已经是第四天了」（もう四日目になった）が時を表しているが、「一人伊豆の旅に出て」の動作主を要求するために、文頭に主格「我」が出現し、文全体が有主格文である。

時を表す「の＋形式名詞コト＋デアル」という形式の文を英語に訳す場合に、時間を表す主格 it を用いるのが一般的である。（9）エは文頭に主格 it があり、有主格文である。

種類①に関して、韓国語訳は無主格文であるが、中国語訳と英語訳は有主格文である。

②　時間、寒暖、距離を表すときに、しばしば主格を欠く。

以下は種類②に当てはまる『伊豆の踊子』中の原文および訳文である。

（11）ア　「いい塩梅に晴れました。」
（11）イ　“날씨가 꼭 알맞게 갰는데요.”
（11）ウ　“天已经大晴啦。”
（11）エ　“We're lucky the weather cleared up,”

（11）アは天候を表す無主格文である。一般的に寒暖などの天候を表す場合には、日本語の表現として主格を欠いても自然であり、文としても安定している。

しかし、訳文においては、（11）イの韓国語訳は、「날씨가」[nalʔʃiga]（天気が／空模様が）が出現し、有主格文である。（11）ウの中国語訳も文頭に主格（また主題）の「天」が出現するため、有主格文である。（11）エの英語訳は原文の「いい塩梅」を表現するために、We're luckyという主節を用いて訳しており、従属節 the weather cleared up にも主格 the weather が出現している。主節も従属節も主格があり、有主格文である。

種類②に関して、韓国語訳・中国語訳・英語訳には主格があるために日本語の原文と異なって有主格文である。

③　所動詞（ニ）ナルにも主格を欠く用法がある。言い表されない主格は、時ガ、気温ガ、状態ガ、事態ガである。

以下は種類③に当てはまる『伊豆の踊子』中の原文および訳文である。

（12）ア　夕暮れからひどい雨になった。
（12）イ　해질녘부터 비가 많이 내렸다.
（12）ウ　从傍晚起下了一场大雨。
（12）エ　Rain started pouring around sunset.

所動詞ナルに関しては、三上（1972b）は「自然の成行き、無意志的不随意的動作、静的な状態などを表す動詞である」と定義している。日本語の原文（12）アの場合は、所動詞ナルを用いて天候が自然の成行きとして雨になるという状態の変化を表す無主格文である。

（12）イの韓国語訳は、「雨になった」の代わりに「雨がたくさん降ってきた」（비가 많이 내렸다）と訳している。「雨」が主格として出現し、有主格文である。

（12）ウの中国語訳は、文頭に主格も主題も出現せず、王（1984）の「关于天时的事件」（自然現象に関するもの）に当てはまる無主格文である。

（12）エの英語訳は文頭に rain（雨）を主格として扱っており、有主格文である。

種類③に関して、中国語訳は無主格（または無主題文）であるが、韓国語訳・英語訳は有主格文である。

④　格助詞カラ、デ、ニが主格の代用を勤めることがある。

以下は種類④に当てはまる『雪国』中の原文および訳文である。

（13）ア　「君から頼んでみてくれよ」
（13）イ　“당신이 부탁해봐.”
（13）ウ　“想托你替我谈谈看。”
（13）エ　“You call someone for me.”

（13）アでは、カラが主格ガを代用してガが文面から消えた無主格文であるが、実際に「君が頼んでみてくれよ」という意味を含んでいる。

（13）イの韓国語訳は、日本語の原文と異なってカラではなく、直接に主格이[i]を用いて訳しており、有主格文である。韓国語訳から見ると、日本語の原文におけるカラが主格ガを代用していることがわかる。

（13）ウの中国語訳は、主格が省かれている無主格文であるが、（13）エの英語訳には、主格 you が出現し、有主格文である。

種類④に関して、中国語訳は無主格文であるが、韓国語訳・英語訳は有主格文である。

⑤　主格代用の形式がある。

(5)

以下は種類⑤に当てはまる『伊豆の踊子』中の原文および訳文である。

（14）ア　畳や襖も古びてきたなかった。
（14）イ　다다미나 맹장지도 케케묵고 더러웠다.
（14）ウ　铺纸和纸槅扇都陈旧了，很脏。
（14）エ　The woven floor mats and sliding panel doors were old and dirty.

種類⑤は、ガ格が「も」によって代用された形の無主格文である。（14）アの日本語の原文は取り立て助詞「も」が主格の代用として機能するため、主格ガが文面から消えている。

（14）イの韓国語訳は、日本語の原文と同様に、「도」[to]（日本語の「も」に相当する）を用いて가(이)[ka/ga(i)]を代用しているが、中国語には「が」や「も」などに相当する助詞がないため、語順により文の成分を示すのが一般的である。

（14）ウの中国語訳は文頭の「铺纸和纸槅扇」（畳や襖）が主格の位置を占めており、その次に「陈旧了，很脏」（古びてきたなかった）という述語が来ているため、有主格（または顕題）文である。

（14）エの英語訳は中国語と同じように、文頭に The woven floor mats and sliding panel doors（畳や襖）を主格として扱っており、有主格文である。また、主格が複数であるため、複数を表す be 動詞 were を使用している。

中国語訳と英語訳と対照してみると、種類⑤の主格の代用という表現方法は中国語と英語に存在せず、日本語と韓国語のような格助詞を持つ言語の表現方法だと言えよう。また、表現上あるいは翻訳上の問題であるが、日本語の原文における「～や～も」という表現は畳や襖以外のほかの何かも古くて汚いというニュアンスが含まれている。韓国語訳には日本語と同じようなニュアンスがあるが、中国語訳と英語訳は「和」と「and」を用いて訳している。「和」と「and」の場合、畳と襖のみ古くて汚いという意味になるから、厳密に言えば、中国語訳と英語訳は、日本語の原文を忠実に訳出しているとは言えない。

種類⑤に関して、韓国語訳は無主格文であるが、中国語訳・英語訳は有主格文である。

⑥　端折りや陰題で“ガ”が文面から消えている場合も数に入れておく必要がある。

以下は種類⑥に当てはまる『伊豆の踊子』中の原文および訳文である。

（15）ア　湯ヶ野までは河津川の渓谷に沿うて三里余り[3]の下りだった。
（15）イ　유가노까지는 가와쓰 강(河津川)의 계곡을 따라 30리 남짓 내리막길이었다.
（15）ウ　沿着河津川的溪谷到汤野去，约有十二公里下行的路程。
（15）エ　The road to Yugano ran about eight miles down through the valley of the Kawazu River.

三上（1970）の挙げた（６－１）と同じように、（15）アは主格が文面から消えている無主格文である。（15）アの文末の「ダッタ」を言い換えてみれば、「下り（道）があった」になり、

主格が現れてくる。また、マデを準体詞と見れば、「湯ヶ野まで（の道のり）は」を含意しているとも考えられる。原文を書き換えて、「湯ヶ野までの道のりが河津川の渓谷に沿うて三里余りの下りだった」とすれば、主格が現れる。

（15）イの韓国語訳は、日本語と同様に主格が文面から消えている。

（15）ウの中国語訳は、王（1984）の「关于“有无”的肯定」（“有無”「存在文」に関するもの）に当てはまる無主格文である。

（15）エの英語訳は文頭に主格 The road が出現しており、有主格文である。英語訳からみると、日本語の原文における文面から消えた主格「下り（道）が」が英語訳では明確に主格として訳出している。

また、以下の（16）アの場合、第一文に主格が出現し、第二文に主格が欠落している。このような無主格文を文脈による「端折り」として検討したい。

（16）ア　踊子が一人裾を高く掲げて、とっとっと私について来るのだった。一間[4]ほどうしろを歩いて、その間隔を縮めようとも伸ばそうともしなかった。

（16）イ　무희가 혼자서 옷자락을 높이 추켜들고 빠른 걸음으로 나를 따라오는 것잇었다. 한 간쯤 뒤에 떨어져 오는데 그 간격을 좁히려고도 늘리려고도 하지 않았다.

（16）ウ　歌女一个人高高地提起下摆，紧紧地跟着我跑。她走在后面，离我一两米远，既不想缩短这距离，也不想再落后。

（16）エ　She was trailing me by about two yards, neither trying to close the distance between us nor dropping farther back.

文脈から見て、（16）アの場合、第一文には主格「踊子ガ」が文頭に現れ、第二文には主格が欠落している。これは略題文に近似している。両者の相違点は、第一文の文頭にくるのが主題か主格かにある。この現象は、二通りの解釈が考えられる。

一つは、第一文にある主格は第二文もしくは第二文以降の文に影響力を持つ。第二文以降には主格が省かれることになる。もう一つは、新情報（new information）と旧情報（old information）という観点から分析することができる。久野（1978）は、「省略は、より古い（より重要度の低い）インフォメーションを表す要素から、より新しい（より重要な）インフォメーションを表す要素へと順に行う」という省略順序の制約を提出している。また、長谷川（2012）は、「『省略は、主題化要素の省略による』と一般化できる」と指摘している。これらの観点から分析すると、（16）アには、「踊子ガ」は新情報であり、次の文の「（その）踊子ハ」という旧情報（主題）が省略可能になる例とも考えられる。

（16）アと同じように、（16）イの韓国語訳も第二文の主格が欠落している。（16）ウの中国語訳は、第一文に「歌女」（踊子）があっても、第二文の文頭に「歌女」を指示する代名詞「她」が出現している。（16）エの英語訳は、文頭に主格 she があり、原文の第二文を副詞句として訳しており、原文の二文を一文にして訳している。

次に陰題に関して、『伊豆の踊子』中の例を挙げる。

(17) ア　暗い町だった。
(17) イ　어두운 거리였다.
(17) ウ　城市黑魆魆的。
(17) エ　It was a dark town.

陰題に関しては、三上（1970）の挙げた（６－２）の「今だって絶対的である父だ」という文を陰題文とみなすなら、その陰題文をひっくり返して見れば、「今だって父は絶対的である」という顕題文に書き換えられる。顕題文は、主格ガが主題化され、主題ハの形で現れている文である。換言すれば、主題化というのは主格が主題に内包されることであり、陰題文の語順を変えると、主題化された主格が表れて来るというのが三上の考え方である。

(17) アの日本語は、文末の「町だった」を文頭に移動させると、「町は暗かった」という顕題文になる。ハがガを包摂しているため、実際に「町が暗かった」という有主格文として考えられる。

(17) イの韓国語は、日本語と同様に無主格文である。

(17) ウの中国語訳は、「城市」（町）が主格の位置にあり、次に述語が現れるため、「城市」を主格（または主題）として扱われ、有主格（顕題）文である。

(17) エの英語も同様に、dark town と日本語の「暗い町」を忠実に翻訳しているが、文頭に it を主格として出現させており、有主格文である。

「端折り」であれ陰題であれ、種類⑥の最も顕著な特徴は「体言＋デアル」を用いて文を止めることにある。とりわけ陰題の場合、語順を変えると主格が現れてくる。陰題で主格が文面から消えるという現象は、主題と主格間にある「表裏関係」の現れであり、助詞ハ･ガと는(은)[nɯn(ɯn)]と가(이)[ka/ga(i)]を持つ日本語と韓国語の特徴だと言える。

対照した結果、種類⑥の端折りに関する例（15）の場合、中国語訳・韓国語訳は無主格文であるが、英語訳は有主格文である。陰題に関する例（17）の場合、韓国語訳は無主格文であるが、中国語訳・英語訳は有主格文である。

⑦　副詞ソウ、コウ、ドウをめぐる問題がある。

以下は種類⑦に当てはまる『伊豆の踊子』中の原文および訳文である。

(18) ア　「高等学校の学生さんよ。」と、上の娘が踊子にささやいた。私が振り返ると笑いながら言った。
「そうでしょう。それくらいのことは知っています。島へ学生さんが来ますもの。」

(18) イ　“이봐요, 고등학생” 하고 언니 되는 아가씨가 무희에게 속삭였다. 내가 돌아다보자 웃으면서 말했다.
“그거 보라구. 그 정도는 알고 있어요. 학생이 섬에 왔군요.”

(18) ウ　“是位高等学校的学生呢，” 年长的姑娘对歌女悄悄说。
我回过头来，听见歌女笑着说：“是呀。这点事，我也懂得的。岛上常有学生来。”

(8)

(18) エ “He’s an upper-school student,” the oldest girl whispered to the dancing girl. When I looked around she smiled.
“That’s right, isn’t it? I know that much. Students are always coming down to the island.”

三上（1970）は種類⑦の例（7）「鯨はケモノかい。そうです。」に関して、「この答えは、無主格で自足的な文と言わなければならない」としている。それは、「この『そう』はコト全体を受ける。つまり、『鯨が』をも吸収している」からである。

(18)アのように、上の娘と踊子の学生に関する会話文であり、主題「彼は」が省かれている。主題を補えば、上の娘の話が「彼は高等学校の学生さんよ」になる。それに対して、踊子の応答は「そうでしょう」となっている。その応答文にあるソウは、実際に命題「彼ガ高等学校ノ学生」というコトを包摂するために、「そうでしょう」という文は主格が不要な無主格文である。

(18) アからみて、文の前後の文脈がある場合や二人の会話の場合には、（7）のようなQ＆Aという形式でなくても、ソウ・コウ・ドウはその前の文を受ける応答として、主格や対格を包摂することがある。

(18) イの韓国語訳は無主格文である。(18) ウの中国語訳は日本語と同じように主格が欠落している。前の文を受けて、その応答としてただ「是呀」（そうでしょう）という動詞「是」と感動詞「呀」だけによる無主格文である。王（1984）の「关于“是非”的肯定」（“是非”に関するもの）に当てはまる無主格文である。

(18) エの英語訳は同じように前の文 He’s an upper-school student を受けていても、その応答として文頭に前文を指示する代名詞 That が主格として出現し、有主格文である。

種類⑦に関して、韓国語訳・中国語訳は無主格文であるが、英語訳は有主格文である。

⑧　主格を不問に付する言い方がある。

以下は種類⑧に当てはまる『伊豆の踊子』中の原文および訳文である。

(19) ア　そして、ぴたと静まり返ってしまった。
(19) イ　그리고 뚝 그치더니 쥐죽은 듯 고요해졌다.
(19) ウ　然后又突然静下来。
(19) エ　Then all fell silent.

三上（1970）の挙げた例（8）「三の鳥居をくぐって、なお五十メートル進むと、やっと拝殿に達します。」のような文には対格があるが、主格が要求されない。つまり、ダレガ三の鳥居をくぐるのかを不問にするというのは三上の考え方である。実際に例（8）は、情景描写の役割を果たす無主格文であると言ってもよかろう。

(19) アの前に「やがて、皆が追っかけっこをしているのか、踊り回っているのか、乱れた足音がしばらく続いた」という文がある。このような文脈において、基本的に（19）アの主格

として考えられるのは「皆ガ」あるいは「足音ガ」であろう。しかし、結果として（19）アは主格が欠落しており、文自体が三上の例（8）のような情景描写の役割を果たしている。そのため、(19）アも文脈上、主格不問の無主格文として認められる。

（19）イの韓国語訳も日本語と同様に主格が欠落しており、無主格文である。

（19）ウの中国語訳は、日本語と同様に情景描写の役割を果たしている。文頭に主格が出現しておらず、王（1984）の「主事者无从根究，或无根究之必要」（動作主がはっきりしない、またははっきりする必要がないもの）に当てはまる無主格文である[5]。

（19）エの英語訳は文頭にallが主格として出現し、有主格文である。

種類⑧に関して、韓国語訳・中国語訳は日本語の原文と同じように主格不問の無主格文であるが、英語訳は有主格文である。

6．まとめ

以上、『伊豆の踊子』の中から例文を抜粋し、韓国語訳・中国語訳・英語訳と対照しながら、三上（1970）の無主格文の八種類について考察した。

種類⑥は端折りと陰題を含んでいるため、それぞれ分けて検討した。対照結果をまとめて、以下の表１に示す。φ印を無主格文、×印を有主格文とする。

表１．日本語における八種類の無主格文に関する中国語と英語の対照結果

日本語における無主格文	韓国語	中国語	英語
①“デアル”を接尾して独立した時を表す一文の場合。例（9）	φ	×	×
②時間、寒暖、距離を表す場合。例（11）	×	×	×
③所動詞（ニ）ナルの場合。例（12）	×	φ	×
④格助詞カラ、ニ、デが主格を代用する場合。例（13）	×	φ	×
⑤主格の代用の形式。例（14）	φ	×	×
⑥－１端折りの場合。例（15）	φ	φ	×
⑥－２陰題の場合。例（17）	φ	×	×
⑦副詞ソウ、コウ、ドウに関わる場合。例（18）	φ	φ	×
⑧主格を不問に付する場合。例（19）	φ	φ	×

穆（2012）は、略題に関する考察を行い、韓国語訳は日本語と同様に略題が見られるという結果を得ている。無主格文においても日本語と同様の結果が得られると予想したが、訳文を用いて対照した結果、種類②、③、④は無主格文ではなかったことが明らかになった。特に、種類②の場合、韓国語・中国語・英語とは異なり、日本語のみ無主格文になっていることが日本語の特徴として注目すべき点である。

中国語・英語の訳文と対照してみた結果、英語訳はすべて有主格文である。中国語訳は、種類③、種類④、種類⑥・端折り、種類⑦と種類⑧が日本語と同様に無主格文であり、残りの種類①、種類②、種類⑤、種類⑥・陰題が英語のように無主格文にならないことがわかった。

日本語・韓国語は、助詞があることによって語順が比較的自由である非階層型言語（non-

configurational language）の傾向が示されているのに対して、英語と中国語は、助詞が存在せず、語順を極めて重視する階層型言語（configurational language）とされている。文頭に名詞句が来、その次に述語があれば、英語の場合、主格（subject）と判断される。中国語の場合、主格または主題と判断されるということになる。中国語訳の種類⑤例（14）と種類⑥－２例（17）はそのような例である。

久野（1978）は、「省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能（recoverable）でなければならない」と主張している。日本語・韓国語は、復元可能な要素または復元可能性（recoverability）のある要素であれば、主格をも含めて文面に出現しないのが一般的である。

英語は常に主格を明示することを要求するため、勧誘文（Let's do itなど）や命令文、祈願文以外に、一般に主格が省かれない。そのため、本稿では、英語を照合枠と見なし、英語訳を通して日本語・韓国語・中国語には何が省略されたか、また省略された要素を復元する可能性を示し得るのではないかと考えられる。

７．今後の課題

本稿では、日本語・韓国語・中国語・英語における無主格文について検討を加えたが、実際に分析する際に、便宜上日本語の（16）アのような文脈による無主格文を種類⑥に入れたが、実際にこのような文を種類⑥に入れることができるか否かについて、検討する余地が残る。

註

１．『伊豆の踊り子』の初版は、1927年（昭和2年）に金星堂によって出版された。

２．吉林大学出版社よる出版された『雪国・伊豆の踊子　雪国・伊豆舞女』は、日中対訳の形式を採り、左ページは日本語で、右ページは葉渭渠の中国語訳である。

３．日本語・韓国語・中国語において、距離を表す単位は「里」という漢字で表記できるが、実際に、国によってそれぞれの「里」の表す距離は異なっている。日本では、1里＝3.9キロ（古くは36町）（広辞苑第六版を参照）である。そのため、原文中の三里は11.7（≒12）キロになる。朝鮮では、일리（１里）＝0.4キロであるため、韓国語訳では、30里（12÷0.4＝30）になる。中国では、１里≒0.4～0.5キロであるため、中国語訳では、12キロと訳している。また、1 mile＝1.6キロであるため、英語訳では、8 miles（8×1.6＝12.8）と訳している。

４．日本語における一間（いっけん）は、1.8メートルに相当する。韓国語においても한 간（一間）は1.8メートルに相当する。中国語では、「間」は助数詞であるが、具体的な距離や長さを表さない。そのため、中国語訳では、直接にメートルを単位として、「一两米」（一二メートルぐらい）と訳している。また、1 yard＝0.9メートルであるため、英語訳では、「about two yards」と訳している。

５．中国語において、日本語のような無主格文が存在する。中国語における無主格文は、「無主句」と呼ばれる。本章では、無主句を無主格文として扱う。王（1984）は、中国語にお

ける無主格文 を以下のように五つの種類に分けている。(日本語訳は筆者)。

① 天時的事件(自然現象)に関するもの。　例:下雨了。　<雨が降っている>

② 「有無」(存在文)に関するもの。　例:有一只狗在院子里。　<庭に犬がいる>

③ 「是非」に関するもの。　例:是我杀了他。　<私が彼を殺した>

④ 真理(またはことわざ)に関するもの。　例:不怕慢,只怕站。　<遅くてもよいが、休まずにやればいい>

⑤ 動作主 がはっきりしない、またははっきりする必要がないもの。　例:后面又画着几缕飞云,一湾逝水。　<後に霞む雲と渓水が描かれている>

王(1984)の五種類は、三上の主張する八種類の無主格文に包摂されると考えられる。

【参考資料】

川端康成(2003)『伊豆の踊子』新潮文庫

장경룡 옮김(1999)『설국(雪國)』문예출판사(文藝出版社)

葉渭渠(2009)『雪国・伊豆の踊子　雪国・伊豆舞女』吉林大学出版社

侍桁訳(1981)『雪国』上海訳文出版

J. Martin Holman.(1998) *The Dancing girl of Izu and Other Stories*. Counterpoint

Edward G. Seidensticker(1981). *SNOW COUNTRY*

【参考文献】

王　力(1984)『中国語法理論』王力文集第一巻　山東教育出版社

郭中平(1957)『漢語知識講話　簡略句、無主句、独詞句』上海教育出版社

久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店

鈴木義昭(1986)「現代漢語における『無主句』と『存現結構』について」『早稲田大学語学教育研究所』第79巻 pp.68-76

長谷川佐信子(2012)「空主語の意味解釈と主題化」『*Scientific Approach to Language*』No.11 Center for Language Sciences Kanda University of International Studies pp.17-46

穆　欣(2012)「日本語・韓国語・中国語の主題の省略について―川端康成『伊豆の踊子』を検討材料として―」山口大学人文学部異文化交流研究施設『異文化研究』vol.7　pp.31-42

三上章(1963)『日本語の論理―ハとガ―』くろしお出版 pp.134-146

三上章(1970)『文法小論集』くろしお出版　pp. 162-168

三上章(1972a)『続・現代語法序説』くろしお出版 pp.54-61

三上章(1972b)『現代語法新説』くろしお出版　p.244

채완・이익섭(1999)『국어문법론강의』學研社

(ボク・キン)